

動詞の意味と状態アスペクト

平澤 洋 一

1. 研究上の問題点

日本語アスペクトの研究は、松下博士（1901）にその萌芽をみて以来80余年、テンス論から独立したアスペクトの文法論的位置づけ¹⁾もかなり固まってきた。研究の集中した「ている」「である」など一部の領域ではほぼ議論の出つくした観がある。残る問題は、諸説のある状態アスペクトの下位分類をどうまとめあげていくか、複合動詞の扱いともからんでくる動詞のアスペクトをどう理論づけるか、構文内での位置づけをどうするかなど、これまでの研究であまり扱わなかったアスペクト全体像の体系的確立である²⁾。小矢野（1982）は、布村（1977）・奥田（1978）をもって日本語アスペクト研究の「転換期」と名付けた³⁾が、動詞の語彙的意味とアスペクトの文法論的意味とを合わせ論じた論考がいくつか現われ、研究は確実に新しい段階に入った。今後の展開によっては、これが「完成期」にもなるう。

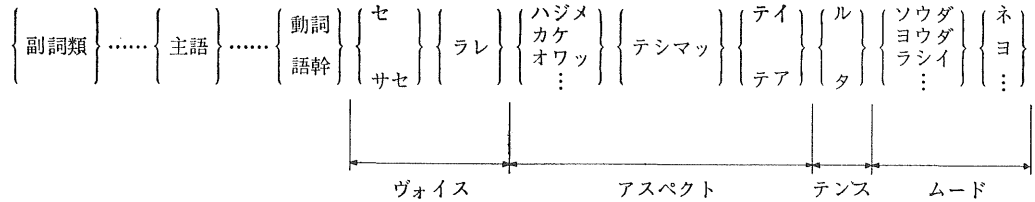
重要な問題点は、次の各項である。

- i 何をアスペクトと考えるか。
- ii いかなる言語形式がアスペクトを表すとするのか。
- iii 日本語のアスペクトとして具体的にどのようなものが下位にたてられるべきか。
- iv アスペクトはどのようにヴォイス・テンス・ムードとかかわっているのか。

i はivと密接に関連する。アスペクトをどう考えるか。小林（1927）は「動作そのものの状態、すなわち動作の形式」、三上（1953）は「動詞の表す動作の様相」、金田一（1955）は「動作・作用の進行の相を示す形態のちがひ」とした。高橋（1969）は「動詞のあらわすうごきの過程のどの部分を問題にするかという、文法的な意味」とした。類似の定義も多くあるが、動詞の表す動きの様相を形態論的にとらえたカテゴリーとみる立場である。スル形とシテイル形の対立にみる文法的カテゴリーとする立場もある。

アスペクトが文法的意味、文法的カテゴリーを表すとする見方に異論はないが、アスペクトは構文の中で孤立したものではなく、ヴォイスおよびテンス・ムード、あるいは副詞をはじめとする修飾成分とも相互に関係を及ぼしている事実を見落としたものであってはならない。全体像を

研究対象におき、スル（完成相）とシテイル（継続相）とが「対立的な関係をむすびながら」アスペクト体系をなし、ヴォイスの対立が同時にアスペクトの対立でもあるとする奥田(1978)や、相互承接を考慮し構文論的に位置づけた寺村(1982)のご論考は、この点で首肯できる。本稿では、アスペクトの構文内位置を次のように仮定したうえで、今後の考察を進めることにする（応答詞・修飾語の一部・助動詞類の一部など、アスペクトと関係の薄いものは省いてある）。



問題点ii, iiiへ移ろう。どのような言語形式がアスペクトを表すと考えるか。具体的にどのような相ないしは態がたてられてきたのか。

- (1) 今、母に手紙を書いている。
- (2) その船なら、もう港に着いているよ。
- (3) 黒板に字が書いてある。
- (4) 眼前に高い山が聳えている。
- (5) 生徒たちが蜘蛛の子を散らすように逃げだすのが見えた。
- (6) 宿題を忘れずにやってくるんだよ。
- (7) 電気が消える。
- (8) 失敗するかもしれないけれど、思いきってやってみるとよい。
- (9) 交通事故で毎日人が死んでいる。

上記の文の多くはアスペクト形式をもつが、どの部分がアスペクトを表すかで意見が分かれる。(1)であれば「書いている」がアスペクトを表すと考えるのは、藤井(1966)、高橋(1969)、鈴木(1972)など。金田一(1955)、井上(1976)、寺村(1982)などは、語幹を除いた「ている」形式がアスペクトを表すとする。ただし金田一(1955)は、(7)のような動詞単体のものも「単純動作態」と呼んでアスペクト形式に含めている。「書いている」全体でアスペクトを表すとすると、「書かせている」のヴォイス形式はどの部分になるのか、「書かせていた」のテンスはどの部分を担わせるのか? 「書く」の語幹には、「ている」だけでなく「てある」「てくる」「ていく」「てしまう」「はじめる」「かける」「つづける」「おわる」といった種々の形式が下接し、「書く」という動作のどの過程、どの様相を表現するかによって、下接するアスペクト形式が決まると考えるほうが整合的である。複数のアスペクト形式の意味素性の結合や、テンス形式との結合を問題にする場合にも、この立場に立つほうがうまくいく。

(2)や(3)は「已然態」とか「結果態」「結果存続態」とか呼ばれるもの、(9)はいわゆる「反復進行態」であるが、名称の違いはあるにせよ、これらをアスペクトと認定する文法家がほとんど⁴⁾である。(4)は金田一(1950)の「第四種動詞」に「ている」がついたもので、金田一(1955)は「単純状態態」、藤井(1966)は「単純状態」、尾上(1982)は「単なる状態」のアスペクトとした。奥田(1978)は、スル形とシテイル形の対立をもたない状態動詞と第四種動詞、対立しても形式だけの対立にすぎない動詞は「アスペクト体系」をなさないとした。

(10) 本社は東京から遠く離れている。

(11) 家の裏には小さな川が流れている。

これらも同類で、動作・変化の過程・結果を表していないものや始動・終結が全く問題になることのないような場合の「ている」は、アスペクト形式ではないとすべきである。

(5)、(6)のような動作アスペクトにまで論を広げた研究ということになると論文数もかなり限定されるが、動作アスペクトを認定する場合に、どこまでをアスペクトとするか微妙な問題である。金田一(1955)は、「はじめる」「だす」「かける」⁵⁾(始動態)、「かける」「かかる」(将現態)、「つづける」(継続態)、「てしまう」⁶⁾「おわる」(終結態)、「てしまう」(既現態)などをアスペクト形式にあげる。高橋(1969)は「ておく」「てくる」「ていく」「てしまう」「はじめる」「だす」「かける」「かかる」「つづける」「つづく」「とおす」「おわる」「おえる」「やむ」「やめる」「きる」「はてる」「あげる」などをとりあげた。松下(1924)は「してみる」を「経験態」と呼んだが、渡辺(1969)は、「てみる」のほかに「てまわる」「てあるく」「まくる」「すすめる」「ちらす」「わたる」まで認めている。

アスペクト形式認定の問題は、結果的にはどの範囲までの言語形式を認めるかであるが、結局は何をアスペクトと認定するかという原点に根ざす問題である。継続態、結果態、反復進行態、始動態、終結態などの諸態は、動詞の表す動作・変化のどのような様相をとらえたものであったかを問い直してみれば、あくまで動作・変化の始動——終結、継続——瞬間、完了——不完了といった「過程」を問題にした文法的カテゴリーだったはずである。この立場に立つならば、アスペクトの定義も「過程」の面をはっきりさせておく必要がでてくる。ここでは、動詞の表す動作・変化の展開過程の様相をアスペクトととらえておく。

「過程」を重視することにより、補助動詞「てみる」「てやる」「てもらう」類と、複合動詞後項の「まわす」「まくる」「ちらす」類は、アスペクト研究の対象からはずれることになる。

もう一つははっきりさせておかなければならないのは、「た」をどう扱うかである。「た」は完了、過去、確認、想起、命令などを表すが、アスペクトにかかわるとされてきたのは次のような場合である。

(12) 曲がった道が続く。

(13) 親に似た子だねえ。

(14) 大きなマンションととなりあった家なので、陽はまったく当たらない。

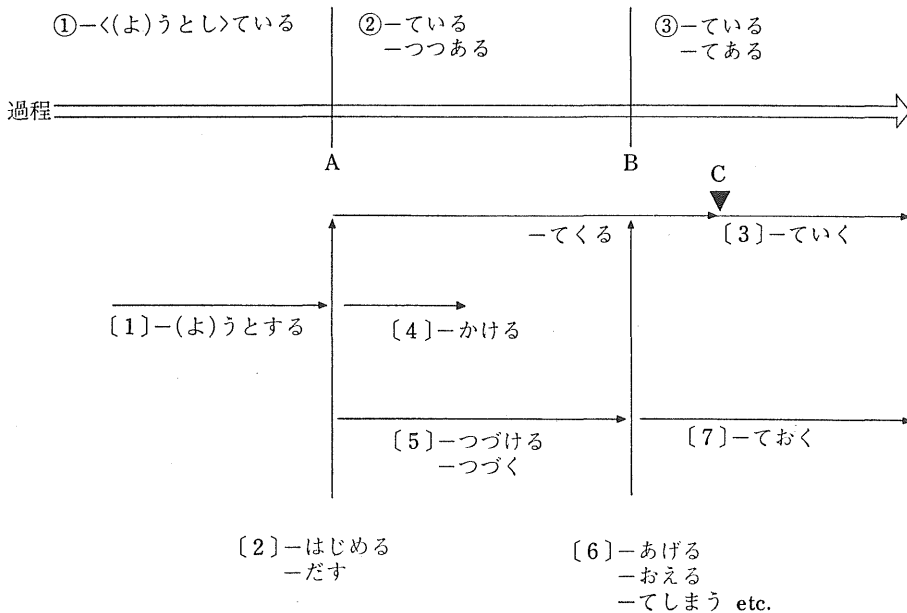
(15) さあ、どいた、どいた。

このうち(12)~(14)は「単純態」や「単なる状態」としてアスペクトに含める文法家が多い。(15)まで認める者は多くはない。(15)を認めるということは、動作動詞の活用語尾としての「る」と「た」を認めることになる。テンスとの関係もあり、アスペクトの根本にかかわる問題である。

2. 意味とアスペクト

前節でみたように、アスペクトをどうとらえるかは、いかなるアスペクト形式を認めるかということに直接かかわってくる。動詞の表す動作・変化の展開過程の様相を表し得る言語形式相互の関係を一応下図のように位置づけたうえで、動詞の意味とアスペクトの関係を考察する。

図の①が将来態，②が進行態，③が已然態の領域であり，①~③は第1種アスペクト（状態アスペクト）を表す。〔1〕~〔7〕は第2種アスペクト（動的アスペクト）を表す。〔1〕を将現態，〔2〕を始動態，〔3〕を漸進態，〔4〕を既現態，〔5〕を継続態，〔6〕を終結態，〔7〕を結果態と呼ぶことにする。第2種アスペクト形式のうち「て」のつかないものは複合動詞の後項である。



(注) C=話者の位置・現時点

〔1〕の将現態は、「書く」「踊る」「流す」「曲げる」のように②の過程をもつ動詞⁷⁾につく場合には「(よ)うとする」が使われ、「かける」がつくと始動後の動作・変化を表すことになる。しかし、「かける」が「消える」「出発する」「死ぬ」のように②の過程をもたない動詞、つまりA始動—B終結という対立の関与しない動詞に下接すると、その動作・変化がまさに起ころうと

するところまで近づくことを表すという差がある。

- (16) 右手を上げようとした時、「待て！」と声がかかった。
 (17) 右手を上げかけて止めた。
 (18) 出発しようとする時になって、一人いないことに気付いた。
 (19) 術後の経過が悪くて死にかけたんですよ。

「(よ) うとする」が〔1〕を表すのに対し、「<(よ) うとし>ている」は①を表す。この場合の「ている」形式が意味素性〔+状態〕〔+継続〕を有し、これは状態動詞「ある」「いる」類や形容詞・形容動詞も同様である。この意味素性の面で①の「<(よ) うとし>ている」と②、③の「ている」とは共通面をもつことになる。ただし、「ている」単独で①のアスペクトを表現することはない。

第1種アスペクトに3類、第2種アスペクトに7類のアスペクトがあり、各類におおむね複数の言語形式があるということは、上接する動詞にもかなり複雑な類型のあることを示している。しかも、その類型は、活用の型や拍数というような形態上の特徴によって弁別されるのではなく、何らかの意味によって弁別されていることが予想される。もちろん意味といっても、語義のことではない。文法的意味のことである。

「座る」「死ぬ」を例にとろう。「かける」を付した「席に座りかけた時」「魚が死にかけた時」はいずれも有意な文ではあるが、「かける」の表すアスペクト領域が異なる。前者は〔4〕、後者は始動点・終結点が同一になる動詞の場合の〔1〕を表す。

次に、時の長さを示す副詞との共起性をみると、(20) はいえても (21) は許容されない文となる。「死ぬ」は〔継続〕性をもたないからである。

- (20) 2時間座っている。
 (21) *2時間死んでいる。

「座る」「死ぬ」のとりアスペクトの差をもう少し探してみよう。

- (22) ゆっくり座りつつある。
 (23) 椅子に座りかけているところへ声がかかった。
 (24) ゆっくり座っている。
 (25) いま椅子に座っている人は誰ですか。
 (26) もう椅子に座っている人がいる。
 (27) *ゆっくり死につつある。
 (28) 魚が死んでいる。

「死ぬ」は始動——終結の対立をもたないので(28)は常に既然態の意味しか表せない。これを「過程」性の欠如と考える。「座る」ではどうなるか。(22)や(23)はあまり自然ではないにせよ非文ではない。アスペクト形式が(22)で進行態、(23)では既現の進行態を表し得る。しかし、これが安定

しないのは、動作としての「座る」の要する時間が極めて短く物理的に進行態として表現されにくい状態にあるからで、この結果、(24)のAspectは一般に(22)と同類にとられず、別の状態に解されやすくなる。

(22)、(23)の「座る」には〔+過程〕〔+継続〕がある。(20)の「座る」は同一状態の継続にすぎない。決して〔+過程〕の「座る」ではなく〔-過程〕〔+継続〕のそれと考えざるを得まい。

これは(25)と(26)を対比することによってよりはっきりする。(25)は同一状態の継続であるから〔-過程〕〔+継続〕をもつ。第2種Aspect〔5〕の「つづける」(継続態)をこの種の「座る」に下接することもできる。が、〔+過程〕〔+継続〕の「座る」に「つづける」はまず付かない。前に述べたように、始動から終結までは時間的な長さが短く、〔継続〕性をもっても極めてわずかな間だけだからである。これに対し(20)や(25)の「座る」の〔継続〕性は安定している。

「死ぬ」や、これと同類の「生まれる」「着く」「届く」などの動詞では、「ている」「でいる」が付くと已然態を表現することになる。ということは〔-過程〕〔-継続〕であることを意味する。

以上のことから、動詞とAspect形式の結合は、動詞のもつ意味素性に左右されていると指摘できる。Aspectを決定づけるのは、動詞の示す変動のどの展開過程の様相を表現しているかということであり、それは当該動詞のもついかなる意味素性が重視されるかにかかっている。

3. 動詞の意味類型

動詞の意味の面からアプローチしAspectを体系化するためには、動詞意味の類型化が必要である。また、類型化にあたっては、日本語の動詞のもつ特性、とくに動作動詞と変化動詞・状態動詞との文法的意味⁹⁾の相違をはっきり押さえておく必要がある。森田氏の分析が示唆に富む。

日本語動詞はそれをそのまま単独で用いると、表現される意味は概念的となる。〈中略〉動作性の動詞は、それだけでは未来しか表さない。「行く」は「後ほど行く」「彼も行く」で、未来の予定・予想であり、現在を表していない。これに「た」が付けば「さっき行った」「いま行ったよ」と過去・完了となる。状態性の動詞の場合は、「ここにいる」「あしたもいるよ」「きのうはいた」と、現在・未来・過去がそろふ。(森田良行『基礎日本語』87頁)

「ある」「要る」「当たる」「値する」や可能動詞は、上記「いる」と同様の性質をもつ。「異なる」「比例する」「反する」「匹敵する」など、関係概念を表す類も、ル形が現在を表すという意味では、「いる」類と同類型をなす。そして、ル形が現在を表現し得るということは、その動詞に〔+状態〕〔+継続〕という素性のあることを示す。このような類型の動詞を状態動詞と呼ぶ。

この類と〔+状態〕で共通面をもつのが、金田一(1950)が「第四種の動詞」と名づけた「聳え

る」「似る」類である。この類はル形が現在を表さないから、上述の状態動詞とは異なる。といってル形がもっぱら未来を表すこともないシタ形が過去を表すこともない。タ形が一般に現在の意味でしか用いられない。

(29) 高い山が聳えている。

(30) 高く聳えた山が見える。

この類の動詞は〔+状態〕〔-過程〕素性を有するにもかかわらず、必ず「ている」をつけてしか用いないが、これはとりもなおさず〔継続〕性がマイナスであることの証左となろう。〔+状態〕〔-過程〕〔-継続〕という特殊な素性をもつので、現在を表すには「ている」が必要となる。「ている」が結合すると、素性結合規則が働いて、 V_1+V_2 の素性は、〔+状態〕〔-過程〕〔-継続〕⁹⁾+〔+継続〕→〔+状態〕〔-過程〕〔+継続〕となり安定化する。このような類の動詞を特殊動詞と呼んで他と区別することにする。

いわゆる動作動詞・継続動詞の場合はどうか。「書く」「見る」「歩く」の類をみると、ル形が現在を表さず、「～から～まで」「ずっと」「2時間」「3日間」「ゆっくり」などの修飾成分と共に、「はじめる」「かける」「つづける」「てくる」「ていく」「おわる」などのアスペクト形式がつき得る。継続する動作・変化を表すことができるから〔-状態〕〔+過程〕〔+継続〕をもつと解してよい。また、始動点や終結点に対する命令も可能¹⁰⁾であるから、〔+完結〕をもつものと考えられる。しかし、「だんだん書く」とか「除々に見る」というような使い方はできないので〔漸次〕性¹¹⁾には欠けているとみななければならない。

結局、この類の動詞の素性は〔-状態〕〔+過程〕〔+継続〕〔-漸次〕〔+完結〕となる。第1節でみた「過程」性があり、この類を過程動詞A¹²⁾と呼ぶことにする。過程動詞には他にB類とC類を設ける必要がありそうだ。

B類からみていく。「飛ぶ」「流れる」「降りる」「燃える」の類で、もちろんル形が現在を表さず、「ずっと」「ゆっくり」などの修飾成分がほぼ可能であるが、「だんだん」「ますます」「除々に」が意志動詞にはまず用いられない。素性は〔-状態〕〔+過程〕〔+継続〕〔±漸次〕〔-完結〕となる。

C類は、「思う」「苦しむ」「忘れる」など。〔過程〕性や〔継続〕性が不安定・希薄なものが多くなる。過程動詞の中では最も変化動詞に近い。〔漸次〕性は比較的明瞭である。

変化動詞にも類型がみられる。変化動詞Aは、〔過程〕性をもつもので「増える」「浮く」「近づく」「枯れる」「濁る」など。もともと過程の終結時の様相をとらえて表す動詞が多いので、「てしまう」とはいつても、「おわる」「きる」「ぬく」「あげる」の類いはまずつかない。始動時の様相は「はじめる」「だす」、展開時の様相も「つづける」「つつある」などで表すことができるので、〔過程〕性をもつとみることに問題はあまい。

「立つ」「座る」「起きる」なども上記の類に似た面をもつが、「だんだん」「ますます」とは共

起しない。B類とする。A類が〔－状態〕〔＋過程〕〔＋継続〕〔－漸次〕〔－完結〕であるのに対し、B類は〔－状態〕〔±過程〕〔＋継続〕〔－漸次〕〔－完結〕であるという違いがある。B類は、「2時間」「ずっと」「朝から夕方まで」など時間的長さを表す成分と共起可能である。A類はそれよりも漸次的な変化の様相が重視される。

変化動詞Cは「死ぬ」「着く」「届く」などで、瞬間動詞といわれてきたものの多くがこの類に入る。「～から～まで」「ずっと」「ゆっくり」「だんだん」「ますます」といった成分と動詞単体での共起は不可能である。B類に比べ〔過程〕性も〔継続〕性もない。「てくる」「ていく」「はじめる」「つづける」なども、反復進行態の場合を除いては下接しない。

これまで述べてきたところをまとめると、まずアスペクトと深いかかわりをもつ意味素性は次のとおり。

〔状態〕＝動詞の表す様態が状態的かどうか。ル形で現在を表現するものや、必ず「ている」を付して現在を表すものは、プラスとする。

〔過程〕＝動作・変化の始動－終結が対立をみせ、時間の経過にともない様態の展開がみられるか否か。

〔継続〕＝当該動詞単体の表す動詞、変化、状態が一定の時間続行するかどうか。

〔漸次〕＝変化の展開が時間の経過とともに徐々に進むかどうか。「だんだん」「次第に」「ますます」などと動詞単体で共起すればプラスとする。

〔完結〕＝始動点や終結点に対する命令が可能かどうか。

8類型の動詞のもつ素性および所属語例は次のようになる。

過程動詞A＝〔－状態〕〔＋過程〕〔＋継続〕〔－漸次〕〔＋完結〕——読む、書く、作る、切る、食べる、飲む、吐く、吸う、蹴る、押す、引く、運ぶ、建てる、掘る、話す、見る、聞く、動く、歩く、走る、駈ける、滑る、通る、笑う、泣く、歌う、考える……

過程動詞B＝〔－状態〕〔＋過程〕〔＋継続〕〔±漸次〕〔－完結〕——飛ぶ、流れる、休む、撫でる、泳ぐ、覗く、遊ぶ、叫ぶ、黙る、騒ぐ、降る、光る、響く、揺れる、燃える、震える……

過程動詞C＝〔－状態〕〔±過程〕〔±継続〕〔±漸次〕〔－完結〕——思う、感じる、苦しむ、悲しむ、嫌う、忘れる、覚える、気づく、あきらめる……

変化動詞A＝〔－状態〕〔＋過程〕〔＋継続〕〔＋漸次〕〔－完結〕——増える、浮く、沈む、近づく、離れる、色づく、太る、荒れる、枯れる、濁る、消える、乾く、暖まる、伸びる、曲がる……

変化動詞B＝〔－状態〕〔±過程〕〔＋継続〕〔－漸次〕〔－完結〕——起きる、立つ、座る、乗る、並ぶ、就職する、結婚する、入る、出る、倒れる……

変化動詞C＝〔－状態〕〔－過程〕〔－継続〕〔－漸次〕〔－完結〕——死ぬ、生まれる、出

発する, 着く, 届く, 戻る, 帰る, 去る, わきまえる, 卒業する……

状態動詞 = [+状態] [-過程] [+継続] [-漸次] [-完結] ——ある, 居る, 要る, 当たる, 値する, 見せる, 話せる……

特殊動詞 = [+状態] [-過程] [-継続] [-漸次] [-完結] ——聳える, ばかげる, 似る, 優れる, ありふれる, ずばぬける, にやける……

4. 反復進行態での素性

アスペクトとして、どのようなものが認められるべきか。第1節で指摘したのは、状態アスペクト(第1種)で①将然態, ②進行態, ③既然態の3種, 動的アスペクト(第2種)として[1]将現態, [2]始動態, [3]漸進態, [4]既現態, [5]継続態, [6]終結態, [7]結果態の7種であった。このうち②, [5]の派生用法として反復進行態と反復継続態とを立てる必要がありそうだ。

反復進行態¹³⁾では、本来は進行態をとれない変化動詞が、多数を表す主語や反復の副詞とともに用いられて進行を表現できる。もちろん、過程動詞A~Cも変化動詞A, Bもこの態をとれる。反復には2種ある。

i 同一主体による同種動作・変化の反復

- (31) 子供たちは毎朝, 朝日小学生新聞を読んでいる。
 (32) 私は毎朝, 砂浜を走りつづけた。

ii 不特定多数の主体による同種動作・変化の反復

- (33) 学生が三三五五集まっている。
 (34) 苗木が日に10本は枯れているのだという。
 (35) 毎年たくさんの人が水の事故で死んでいる。
 (36) その月は疫病が流行し, 毎日2, 3頭の牛が死につづけた。

(35)では、 V_1 としての変化動詞「死ぬ」が V_2 としての「でいる」と結合して全体で [+状態] [+反復] [-過程] [+継続] [-漸次] [-完結] をもつものと思われる。問題は、この中の [+反復] がどのようにして生じたかである。 V_2 の「でいる」が [+状態] [+反復] [-過程] [+継続] [-漸次] [-完結] を有すると解すると、反復態の時のみ「でいる」に特別の素性を担わせることになる(将然態・普通の進行態・既然態の「でいる」とも [+状態] [-過程] [+継続] [-漸次] [-完結] である)し、典型的な状態補助動詞としての「いる」が [+反復] をもつとすること自体が不自然である。

とすると、(35)の「死ぬ」に [+反復] を負わせるしかなくなろう。(35)の「でいる」の支配を受ける文「毎年たくさんの人が水の事故で死ぬ」の動詞は、副詞「毎年」と共起するために [-状

態〕〔+反復〕〔+過程〕〔+継続〕〔-漸次〕〔-完結〕をもたざるをえないのではないだろうか。そして、これが「ている」の素性と結合する。

V_1 「死ぬ」+ V_2 「ている」=〔-状態〕〔+反復〕〔+過程〕〔+継続〕〔-漸次〕〔-完結〕+〔+状態〕〔-過程〕〔+継続〕〔-漸次〕〔-完結〕→〔+状態〕〔+反復〕〔-過程〕〔+継続〕〔-漸次〕〔-完結〕

$V_1+V_2+\dots+V_{n-1}$ における素性結合の原則と思われるものは次の $i \sim V$ である。

- i 素性結合は V_1 と V_2 の結合から始め、 V_2 と V_3 、……、 V_{n-1} と V_n の順で行う。
- ii 結合の対象となる二つの V に同じ素性がある場合は、符合の正負を問わず、下接する V の素性を残す。
- iii 結合の対象となる二つの V の一方にしかない素性は、そのまま残す。
- iv 素性結合を終えた二つの V のうち、上接する V に残った素性は、下接する V とその次の V との結合およびそれ以後の結合には関与しない。

V 状態アスペクトを表す V が下接した場合、それ以後の結合は行われない。

最後に、状態アスペクトとそれを取り得る動詞との組み合わせについて。①の将然態（くうとし>ている）は過程動詞 A~C および変化動詞 A~C であるが、過程動詞 C のうち「思う」「感じる」「苦しむ」「悲しむ」など一部の動詞はほとんど使われない。②の進行態（ている・つつある）で使用の安定しているのは過程動詞 A と変化動詞 A。過程動詞 B, C, 変化動詞 B はやや不安定、変化動詞 C はこの態をとらない（反復進行態を除く）。③の既然態（ている・てある）は過程動詞 A~C と変化動詞 A~C。ただし「てある」（上接するのはほとんどが他動詞だが、過程動詞 C はほとんど使われない。自動詞が上接することもある）が安定しているのは過程動詞 A だけである。状態動詞および特殊動詞は状態アスペクト、動的アスペクトのいずれをもとらないとみてよいだろう。

大ざっぱではあるが、日本語の動詞の意味類型と状態アスペクトとの関係を検討してきた。まだ必ずしも説明の行き届かない所もある。動的アスペクトとの結合の問題もある。アスペクト体系の全体像は稿を改めて扱う。

注

- 1) 研究史は高橋太郎「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」（『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、1967）や小矢野哲夫「国語学におけるテンス・アスペクト観の変遷」（『日本語学』1-2, 1982）がコンパクトにまとめている。
- 2) 体系的な論考もいくつかはある。寺村秀夫「テンス・アスペクト・ボイス」（『日本語と日本語教育——文法編』文化庁、1973）、仁田義雄「動詞の意味と構文」（『日本語学』1-1, 1982）、尾上圭介「現代語のテンスとアスペクト」（同 1-2）など。
- 3) 前出 1) 参照。
- 4) たとえば金田一（1955）、藤井（1966）、高橋（1969）、工藤（1982）などは反復進行態ないし反復態を、

- 井上 (1976) は反復相をたてる。吉川 (1976) は、この態をたてない。
- 5) 「かける」は動詞の意味により「始動態」または「将現態」を表す。
 - 6) 「てしまう」は「終結態」または「既現態」を表す。
 - 7) いわゆる継続動詞とは必ずしも一致しない。
 - 8) 認知的意味および情緒の意味に対する文法的カテゴリーでの意味。
 - 9) 他に〔一漸進〕〔一完結〕の素性が必要であることは後述する。
 - 10) 「早く書け」「早く見ろ」などの命令表現は、「書く」「見る」という動作の始動点に対する命令としても、終結点に対する命令としても使い得る。
 - 11) 〔漸次〕性や〔完結〕性については、仁田 (1982) に体系的な分析がある。
 - 12) この類は一般に動作動詞ないしは継続動詞と呼ばれてきたが、動作か変化かという対立よりも過程をもつか否かのほうがより有効な対立と思われるの、このような名称で呼ぶ。従来、変化動詞とされてきたものの中にも過程をもつものがある。
 - 13) 金田一 (1955) は「反復進行態」を、鈴木 (1958, 1972) では「くりかえし」を、高橋 (1969) は「くりかえしの進行」を、井上 (1976) は「反復相」をたてる。

引用文献

- 松下大三郎 (1901) 『日本俗語文典』誠之堂書店
 松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』紀元社
 小林 好日 (1927) 『国語国文法要義』京文社
 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』中文館
 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15号
 三上 章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院
 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X 文学四
 藤井 正 (1966) 「『動詞+ている』の意味」『国語研究室』5号
 渡辺 義夫 (1969) 「『～している』との関連における『～してある』」『福島大学教育学部論集』21-2
 高橋 太郎 (1969) 「すがたともくろみ」教育科学研究会文法講座テキスト
 鈴木 重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』麦書房
 寺村 秀夫 (1973) 「テンス、アスペクト、ヴォイス」『日本語と日本語教育—文法編—』文化庁
 高橋 太郎 (1976) 「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
 井上 和子 (1976) 『変形文法と日本語』(下) 大修館書店
 布村 政雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大学国語国文』8号
 奥田 靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって」(上・下)『教育国語』53, 54
 仁田 義雄 (1982) 「動詞の意味と構文」『日本語学』1-1
 寺村 秀夫 (1982) 「テンス・アスペクトのコト的側面とムード的側面」『日本語学』1-2
 尾上 圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1-2
 小矢野哲夫 (1982) 「国語学におけるテンス・アスペクト観の変遷」『日本語学』1-2